令和７年度第１回兵庫県地域創生アクション委員会 議事要旨

日　　時：令和７年５月 14 日(水) 10:00～12:00
場　　所：兵庫県庁３号館７階参与員室
議事要旨：

〇事務局
　昨年は地域創生戦略会議 企画委員会で皆様大変お世話になった。昨年の委員会で議論していく中で、従来は自然増対策や社会増対策のいわゆる人口対策が中心だったが、居場所と役割を創る、あるいは寛容性を拡げるなど、ウェルビーイングの視点を盛り込んだ戦略となった。こういった地域創生戦略は前例が少なく、非常に高い評価を受けている。改めて皆様には感謝申し上げる。
　本戦略の大きな特徴の１つとして、策定後も継続的にブラッシュアップを図る仕組みを設けたことが挙げられる。例えば６つの戦略推進プロジェクトを掲げているが、5 年間の計画期間中に、それぞれのプログラムを着実に充実していこうというものであり、その中でも一番大きな仕組みが、この委員会となる。戦略を実のあるものにしていくためには、これからが本番で、ぜひ委員の皆様には、様々な意見や提言、さらには、プロモーション活動にも協力いただきたい。
　本日は皆様に、具体的にどういった場面で参画いただきたいかを中心に説明させていただく。前例のない取組みのため、まだ具体的に内容が固まっていない部分もあるが、だからこそ忌憚ない意見をいただきたい。

【事務局から資料１、２を説明】

〇委員
　委員の皆様にはこの戦略推進プロジェクトにも参画いただき、現場視察も考えている。現場視察が可能なプロジェクトの具体的な事業をリストアップしている。事業調整が難しいが、可能であれば案内していきたいと考えている。
　コアになるプロジェクトは「五国のご縁(五縁)プロジェクト」があるので、これについては地域創生フェスや、12 月に開催予定の地域創生アイデアソンが、今年度の委員会のメインになってくるかと思う。
　2 つ目の「地域のネクストリーダー発掘プロジェクト」については、他部局の事業だが、非常に関係性が強いと思われるもの。連携しながら、「地域創生インターンシップ」として実施できればと考えている。

〇委員
　アクション委員会が、今日と 10 月の 2 回開催予定とのことだが、第２回の委員会までの間に、委員それぞれがどういう活動をしたのか、共有し学びあう機会があれば、10 月の委員会がより有意義になるかと思う。
　視察先は、それぞれの委員の専門分野に行くのか、全然知らない分野に行き学ぶ想定な

のか。

〇委員
　全然知らない分野への視察でも良いと思う。

〇事務局
　部局からこの分野の方の意見を聞きたい等の希望はあるかもしれないが、基本的には委員の皆様全員に声を掛けさせていただき、参加できる方に来ていただきたいと考えている。

〇委員
　事業担当部署との調整となるため、すべて自由に視察することは難しい。日程が合う日があれば、現地視察をお願いすることになるかと思う。

〇委員
　人口増からウェルビーイングを重視していく流れの中で、先ほどこの戦略は先進的という話があったが、このプロジェクトが今、先進的であったとしても、そこで満足してはいけない。昨年度はそれぞれ専門分野の方の意見を聞き刺激を受けたが、先ほど委員が言ったとおり、その方々が専門外の問題を見たときの意見が必要になってくるかと思う。
　日程等の都合上、全委員が動けるわけではないので、他の分野を、他の委員が現地視察等された際にどう思われたかをリアルタイムでどう共有するのかが重要となる。８月の地域創生フェスや 12 月のアイデアソンまでに実施すれば、より成果としては出るのではないか。

〇委員
　視察は調整が大変だと思う。担当部署は、「委員に対して丁寧に説明しなければならない」と構えてしまう可能性があるため、もう少し気楽な対応で構わないという雰囲気をあらかじめ伝えておくことが望ましい。事前に資料送付の上、委員自身が事前に勉強するなど、もっと担当部署が受入れやすくするような環境を整えることが課題かと思う。また、視察といっても、普段のあり方を見せていただくことが大事。

〇委員
　何を学ぶかは見に来た側が考えることなので、普段のあり方を視察させていただきたい。

〇事務局
　受入れ側は、どういう目的で視察をしたいのかを気にする。例えばマルバツを付けられるのではないかという警戒感をもって受け止められてしまうと、こちらの意図とは変わってくると思う。どういう趣旨かを整理しながら、どうアプローチしていくのか考えていきたい。

○委員
　現地視察に行くと、委員会での議論の質が高まると思っている。会議資料には4事業が挙がっているが、全部は難しいのではないかと思っている。参画しやすいところから、視察できれば良い。

○事務局
　部局が直接事業を実施している姿なのか、委託や補助などの県事業に関わっていただいている民間の方への視察なのかで担当部局の反応も変わってくると思う。今挙げている教育委員会の事業は、我々がしたいことと趣旨が近いものがあり、受入れに対する抵抗は少なかった。やはり、その事業の趣旨が地域創生と、親和性を感じてもらえるかによって、その部局の対応が変わってくる。そこは我々も説明し、調整を進めていきたい。

○委員
　課題を知ることが大事なので、うまくいっていない姿を見ることも必要だと思う。そのため、無理に物事が順調に進んでいるように見せる必要はないと、説明してもいいかもしれない。
　コラボレーションプロジェクトや、地域のネクストリーダーについて、何かご意見があればいただきたい。

○委員
　全体に関わる意見として、地域創生戦略会議とは別に、アクション委員会はもう少し柔軟な立ち位置であるべきではないかと感じている。先ほど事務局から、兵庫県の地域創生戦略が人口増からウェルビーイングへと重点を移した点が、高く評価されたという話があった。このアクション委員会に参画するにあたり、そもそもどのような評価軸をもって取り組むべきか、あらかじめ整理しておく必要があると考えている。
　私たちが現地視察し、「ここに課題がある」といった個別の指摘をすることも重要だが、それとは別に、「この戦略に基づいて、こうした取組みを行っている」という視点からの評価も必要となる。戦略の中で提示された評価軸に基づいて取組みに向き合わなければ、戦略の理念から逸れてしまう可能性がある。
　したがって、このアクション委員会として何を評価の軸とするのか、戦略全体の評価軸と照らし合わせながら、事前に議論しておくことが重要だと考える。

○委員
　KPIを決めているが、その評価軸はゴールに近いものであり、そこと、個々の事業がどういうふうにつながっているか、実は意識しないといけない。しかし、多くの場合、個々の事業の担当課はここまで意識できていない。
　だから我々は、個々の事業の実態を把握する際に、それらがKPIやゴールと適切に連動しているかどうかを意識的に確認し、必要に応じて改善点を指摘する役割を担っている。そのためにも、現場視察を通じて実情を把握することが重要であると考える。

〇委員
　地域創生コラボレーションプロジェクトで、特に期待したいのは、たとえば神戸と但馬の人々を音楽や趣味活動などを通じてつなぐような取組み。現在、103 件の応募のうち 76 件が進行中とのことだが、それぞれが自分の地域や得意分野での取組みかと思う。その中で、五国を横断的につなぐような活動や、多自然地域のネットワークづくりを目指す動きがあれば、そこをフォローアップできれば良いと考えている。今は個別に活動している方々も、他の地域や団体とつながるきっかけを作ることで、「五国のご縁（五縁）プロジェクト」の意義がより深まるかと思う。このコラボレーションプロジェクトが、そうしたつながりを生み出す場として機能することを期待している。
　視察に関しては皆様が言われたとおり、気軽にかつ他の分野にも参加することに賛成する。

〇委員
　「つなぐ」ことが重要との言葉があったが、私もこの間のオンライン会議で、「つなぐ」ことが見える化すると良いと意見した。やはり「つなぐ」ことがこのプロジェクトの最大の目的なので、それが実感だけでなく見える化できる仕掛けが必要。特にこの地域創生フェスの現場にいた人たちの新しい出会いが量的に見える仕掛けづくりがあるといい。その後、どういう活動が実施されたか、すべてをデータでは拾えないが、その事例を収集して、ホームページや SNS で発信して見える化していく必要があると思う。

〇事務局
　76 件ほどの提案について深掘りを進めているが、その中ですでに、参加者同士がお互いの取組みを知り、つながって何か一緒に取り組みましょうという話がいくつか出てきている。なので、例えば当日、そういった方々に一緒に発表してもらった件数や、フェスでつながり、今まで知らなかった方同士がつながって新しい取組みを展開した件数などを数値化していきたいと思っている。

〇委員
　小さなつながりでもいいので、上手く数値化して見える形になると良いと思う。

〇事務局
　このアクション委員会と、各部局が所管する施策との接続をどう図っていくのか、まだ引っかかりがある。昨年度の企画委員会で交わされた議論や理念が、各部局の施策に反映されていくといいなと考えている。
　どういう形で関わるか、あるいは現地視察に行くことも大切だが、その施策自体を所管している職員と、まずしっかりとコミュニケーションを図った方が良いと思っている。そうすることで、具体的に目の前にある課題もそうだが、アクション委員会の委員の方々が見ている世界であったり、地域創生に向けての熱量など、こういう世界観があるということに気づくことができる。職員にとっては意味のあることだと思う。

課長が言われたように、警戒されるようなセットの仕方になる恐れもあるが、委員と各担当事業の職員が話す中で、何らかの気づきを得るような場をセットできないかと思っている。担当部局側のモチベーションとしては、本年度の予算の中にも地域創生枠があり、国の交付金をどう配分するか議論する中で、地域創生を重点的に進めるものについては別枠で議論するような取扱いになっていた。次年度はどういう形になるかわからないが、予算編成の中での取扱いも含めて、地域創生との関わりをしっかり作っていけば、自分たちの部局の事業も、ある程度県政の中での重点的な位置付けを得られて、予算の面でも議論を経ているものと位置付けられるようなインセンティブはあり得るのではないかと思っている。そんな観点も含めて、職員とこういう世界感を共有することが大事ではないかと思っている。

〇委員
担当部局のうち関心があるところから始めるという形態だったら上手くいくかもしれない。すべてに関わるには、我々のリソースが足りない。
現場視察で話をすると、現場での課題は分かるかもしれないが、結局はミクロ単位でしか話ができない。先ほどの事務局の意見は、もう少し大きいところから、そのマインドセットを変えることで、よりミクロ単位まで浸透できるのではないかという話。そのとおりだが、担当部署は多岐にわたるので、どうやって我々が関わっていくのか難しい。

〇事務局
ご意見のとおり、地域創生戦略の理念をどう具現化していくかは大事な視点であり、重要なこと。具体的な６つのプロジェクトは、そういった意味では、部局横断的な施策のパッケージになっている。それを具体的に、アクション委員会の皆様との関わりにどう落とし込んでいくのか、具体的なアイデアがまだない。
予算編成との関わり方の問題もあるため、財政当局側がどう受けとめるか、現実的な問題としてあるかと思う。ご指摘の点は大事な視点であると受けとめている。

〇委員
地域創生フェスに関連する担当部署の職員に来ていただき、地域創生の理念などを理解していただくことは可能かと思う。

〇事務局
フェスは関係部署に呼び掛けて、実施していく予定。

〇委員
アクション委員会の委員との交流を提案してみて、関心のある部署については、事務局が言われたような、機会を設ける形が落としどころかと思う。

〇事務局
まずは県民局単位での実施も考えられる。各県民局は予算の中でその地域密着の事業を

毎年度考えていかないといけない。来年度施策を考えようという県民局のタイミングで、アクション委員会委員から助言をいただける場は、ニーズがあると思う。県庁内でもニーズのあるところからマッチングする場を設けることは考えられると思う。

〇事務局

先ほど発言あったが、理念を共有していくことは大切。その一方で、現場を見ていただき、具体的な課題を見つけていくことも大切。各部局や県民局との関わりについて、どういう形がいいか考えていく。

一番重要なのは、地域創生コラボレーションプロジェクトだと個人的には思っている。今回の地域創生戦略の理念であり、新しく打ち出した方向性として「地域や人をつなぐ「縁」を生みだし、共創の取組みを五国に拡げる」という副題をつけた。今までの議論の中で、個々に活躍されている方々が地域に点々としており、その点と点を線にして縁にしていくことが重要との話があった。10 年間地域創生に取り組み、点は生まれたが、それを結んでいくことが大切だということで、そういった縁を生みだしていくことを理念とした。

この委員会について、多様な分野の委員が集まり、昨年の活発な議論の中で、お互いを刺激し合うことができたかと思う。この委員会の雰囲気もまさに縁を結び、縁をつなぐことにつながった。今回新しく生まれた基本理念である「縁」を生み出すことについて、一番具現化するプロジェクトが、このコラボレーションプロジェクトであり、特に 8 月の地域創生フェスだと思う。ここで大切なのは、多様な分野の方が取組みを説明し、「こういった協力を欲しい」など、自由に発言し合い、そこで分野間の交流が起こることだと思う。また、神戸での取組みが、但馬や淡路などに拡がる、そういった場になれば、この地域創生フェスを通じ、多様な地域特性を持った地域の中で活躍をしているプレイヤーのコラボレーションが生まれるのではないかと思っている。

この事業は継続して充実していきたい。その上で、今回の成果をいかに発信するかが大切になる。フェスをきっかけに生まれたつながりや、展開された新しい取組みをアンケート等の形式で追って、定量的に発信しないといけない。しっかり追って、発信することで、また来年この場に参加したいと思えるようなプレイヤーや市町、企業、団体を増やしていきたい。今年が非常に重要なので、仕立てもだが、委員の皆様にも参画・アドバイスいただき、つなげていただくような役割もお願いしたい。

〇委員

先日のオンライン説明会に参加したが、巻き込み方もうまく取り組まれていると感じた。地域創生アイデアソンを洲本で開催予定とのことで、五国に波及していくことが、こういうふうに見える形で実施できるのは良いこと。次年度につながる取組みになっていると思う。

地域のネクストリーダー発掘プロジェクトは、実施が難しいと思う。先ほど委員も言われたが、受入先・大学生にとっても３ヶ月の活動期間はハードルが高い。

○事務局
　所管課と調整しているが、やはり課題は学生を集めること。

○委員
　インターンシップの期間が、6 時間×24 日と決められている。また、受入れ先での活動に加えて、参加する学生が自主的なプロジェクトに取り組む必要があるため、伴走支援をする必要がある。受入れに対する謝金もないため、受入れ先の負担は大きくなる。

○委員
　採用前提で受入れるぐらいの設計になっている。受入れ先のリソースとして、1 人分ぐらい取られてしまうことも課題。

○委員
　それでは、資料３について、説明をお願いする。

【事務局から資料３を説明】

○委員
　県庁・自治体の職員の巻き込みは、私も大事だと思う。事務局だけで作るのではなく、どれだけ巻き込んで、実際の企画や運営に携わっていただくか、どれだけ手数をかけられるかによって、終わった後のエンゲージメントが変わると思う。
　１年目なので、強制参加ではなく、県民局等でニーズのある方を、少ない人数でも積極的に参加できるような仕組みを作り、そこからの波及を来年度以降に取り組むのも良いと思う。積極的に参加する方がいると、委員とのコミュニケーションも成果のあるものになると思う。
　ひょうご地域創生ゲームは、ファミリー層向けなのか、疑問に感じた。私も子供にカードゲームを買って遊ばせたりしたが、子供は頭を使わないといけないゲームはすぐに飽きる。
　ゲームを作成・配布するだけより、親子でワークショップに参加していただき、尼崎トゥーザフューチャーのようなゲームを自分達でアレンジして遊んでいただくほうが、親も子供も面白く感じるのではないか。

○委員
　私もプラットフォームは大切だと思っており、少人数でいいので積極的に参加いただく形が良いかと思う。
　ゲームは事務局から事前に説明を受けた際に、使うイメージが湧かなかった。作ることが目的ではない。

○委員
　先ほどの他部署との横断についての課題で、少人数であっても、興味があり積極的な方

と一緒に取り組んでいく方が、最初の渦を作ることができると思う。
　例えばワークショップについて、より効果的に実現するためには、登壇者だけが企画するのではなく、テーマや課題に関連した部局の方と一緒に企画する。そうすると、積極的な職員の方と関わりを持つハードルが下がるのではないかと思う。ワークショップの企画という趣旨であれば、その目的は学生の将来への選択肢を増やすきっかけ作りであり、事業の評価ではないので、先ほど議論のあった職員同士の連携の解決策になるのではと感じた。
　ゲームについて、今の内容では子供は遊ばないと思う。今はスマホやパソコンのゲームが中心になりつつある。私の出身地では、地元独自のかるたを作っており、小学校ではそのかるたを使って大会が開かれる。子供たちはかるたに書かれている名産品などを全部覚えている。そのくらいのことをしないと、遊ばないし、覚えない。

〇委員
　以前、尼崎トゥーザフューチャーをやったことがあるが、対象はファミリー層ではないと感じた。
　ただ、尼崎トゥーザフューチャーに限らず、どういうふうに地域創生を理解していただくか考えたときに、カードゲームは有効だと思う。カードゲームを作る過程自体をワークショップにして半年間程度ゼミなどで取り組むことも、手法の一つとして有効ではないかと感じている。
　使い方のイメージが湧かないとの意見もあったが、アイスブレイク的に使って、その後にディスカッションやワークショップを実施するのも面白いのではないか。そのため、対象はファミリー層ではなく、大人向けだと思う。
　広報・プロモーションの中で、新たな縁を生み出すきっかけを作るということなので、地域創生という言葉を前面に出さないとは思うが、何を推進していくか考えたときに、「地域創生」と聞くと、道の駅や地場産業振興などのハードしか思い浮かばないのではないか。今の国の地方創生 2.0 を見ていると「暮らし」にフォーカスされており、それが県の戦略にも反映されていると思うが、地域創生という言葉から、一般の人が得るイメージと私たちが話している内容で大きなギャップがあると思う。それをどういうふうに埋めていくか、プロモーションの中で戦略的に考えることも大事。

〇委員
　ゲームを年度内に作る必要はない。作るプロセスに県民がどう参加するかが大事ではないか。作るのであれば、時間をかけて、多くの人を巻き込み、「作るプロセス」を目的とした設計の方が良いのではないかと思う。

〇委員
　「love_hyogo」などの SNS と連携できるかと思う。SNS に投稿されている兵庫県のきれいな景色を採用するなどすれば、県民が参加できる。

○委員
　戦略ワークショップについて、例えば大学であれば、どのタイミングで実施すれば良いか考えていた。よく1年生のときには、社会で活躍されている方を授業に呼ぶことがある。そのときは将来に期待を寄せるが、2年生・3年生になると、皆が順調に進むわけではなく、急に現実が見えてきて、目の前の就職活動だけで人生のキャリアを考えてしまう学生が増えてくる。そういう意味では、3年生の秋口や終わり頃に、ライフコースを自力で組み立ててこられた委員の皆様の話を聞いて、単にグループミーティングをするよりは、その方の人生やキャリアの作り方を聞いて、自分の考えているキャリアデザインをどう考えるべきなのかを学生に発言させると、非常に意味のある場になる。今まで見えてこなかった、いわゆる大企業に入る以外の選択肢も見えてくるのではないか。実施のタイミングと、ワークショップでの投げかけ方を工夫すれば、県内に就職し、それぞれの能力を生かして活躍する学生が増えてくる可能性はあると感じた。

○委員
　大学生でも学年によって全然違う。3年生の秋になると、現実に落とし込んだ将来像みたいなことしか考えられない世界になっている。
　自分らしく生きている人に会うと、この世の中はこんな生き方が出来るのかと驚くことがある。高校生ぐらいのときに、そういった生き方を知ることも重要だと思う。

○事務局
　戦略ワークショップの実施校には地域創生フェスへの案内も行う。また、「地域創生」そのものを教えていくわけではなく、ロールモデルの仕事や生き方を話していただいて共感を得ていただくようなワークショップにしたい。

○事務局
　情報発信していく上で、県としての過去の蓄積があると思う。まずはそこを掘り下げ、ワークショップやゲームにしても、同様の事例があると思うので、どういう成果が出たのか、そこに参加した人がどういう進路で、どういうキャリアを積んだのかを、単年度だけで見るのではなく、長い時間軸の中で追うことで、県の取組みの成果をとらえていけるのではないか。まずは検証することで、何を社会に対して発信していくべきかが見えてくると思う。

○委員
　行政は3年程度で人が異動してしまうので、過去の効果検証が足りない部分がある。

○事務局
　ご指摘のとおりで、これまでの広報の効果については検証しないといけない。また、戦略ワークショップだが、計画課の若手職員を中心に、中学や高校、大学に出向いて実施してきた。比較的評価は高い事業だが、内容は将来の夢みたいなものを語り合うことが中心となっている。それはそれでいいと思うが、理想を語るだけで終わってしまう懸念がある

と感じていた。
　そういった課題を踏まえて、この戦略ワークショップを考えた経緯がある。これは、実際のロールモデルの方の生の声を学生に伝えていただく取組み。夢を語るのはもちろんだが、どうすれば地域課題が解決するか、実際に地域の具体的な課題に触れて、自分たちの関わり方について、具体的に考えられる、そういったきっかけが作れるワークショップを実施したいという思いで考えた。なので、この部分は過去を掘り下げて考えた上での取組みだと思っている。
　実際にロールモデルの話を聞くことができるとなると、今まで以上に引き合いがあるかもしれない。そうなったときに、委員の方々だけでは対応できないと思われる。うまく運用できれば、委員の方々以外のロールモデルの方にもお声掛けをしていく、そういった発展の仕方があると思っている。
　ゲームの話だが、私も尼崎トゥーザフューチャーをやったことがあるが、老若男女が集まる会場で、5 人～10 人のグループで遊ぶと、すごく盛り上がる。ただ、家で遊ぶようなゲームではないので、対象はファミリー層ではないと思う。まさにワークショップみたいな場で、アイスブレイク的な活用は考えられる。
　ご指摘のとおり、ゲームを企画して制作するところから県民の参画を得るのが良いアイデアと思ったので検討させていただく。

〇委員
　広報の目標値を記載しているが、これは KPI としては結構難しい。調査手法が無作為のアンケートとなっており、今回の取組みが届いている人たちではない。こういう KPI を持つことは必要だと思うが、例えば地域創生フェスに来てくれた人たちに、事前と事後でアンケートをとってはどうか。県民アンケートだと、直接コントロールできないアウトカムとなってしまうので、直接、取組みが届いている人たちを対象とした成果を取っておかないといけない。

〇事務局
　事前事後を意識して手法を検討していく。

〇委員
　過去の反省・検証について、SNS を活用した情報発信は、地域創生戦略の中で実施してこなかったのか。

〇事務局
　すべてを検証できてはいないが、地域創生通信については、関係機関への配布とホームページで発表するのみで、積極的に届ける取組みはできていなかったとの反省がある。

〇委員
　私たちの考えている「地域創生」と県民の方が思う「地域創生」には、大分乖離がある可能性がある。アカウント名に、「地域創生」を入れるが良いだろうか。むしろインスタグ

ラムの「love_hyogo」はブランドとして浸透してきている。

〇委員
　このSNSの目的を何にするか考える必要がある。フォロワー数にするのか、それとも、常に最新の、地域創生の取組みを投稿するためのホームページのような役割にするのかによって、使い方が変わってくる。

〇事務局
　基本的には、一方通行の情報発信がメインになるかと思う。インスタグラムの方は、県民参加型の運用がメインになっているので、そのアカウントで一方的な情報発信を行うのは馴染まないのではないか。
　ただ、広報・PRしていく上では、参加型の要素も重要なので、そこはハッシュタグを使い、キャンペーン展開などを考えていきたい。

〇委員
　SNSの運用について、委託せずに県庁職員で行うのか。

〇事務局
　予算の関係もあるので、持続可能性を考えると事業者への委託は難しい。

〇委員
　ホームページとSNSの戦略は短期間で変化している現状。今はホームページが改めて見直されている。ホームページは印象が大切だったが、今言われているのは、1ページ目でどれだけ分かりやすいかを意識すること。1ページ目に誘導を入れると、その転換率が高い。効果のないSNSを運用しても、ただ乱立するだけになってしまう。

〇委員
　アカウント名をインスタグラムと同じ「love_hyogo」にしてはどうか。既に6万のフォロワーがおり、ブランド力がある。
　地域創生とアカウントの中に説明を入れたら良いと思う。新規のアカウントがフォロワー数を獲得するのは、なかなか難しい。

〇委員
　2つのアカウントを持つならば相互連携して、それぞれ違う情報発信をするのだろうと思うが、全体的な戦略がないと手間が増えるだけになる。ホームページの方が信頼性があるため、インスタで得た情報をホームページで詳しく知ってもらえるように誘導するなど。総合的にどのように影響し合うのか、考えないといけない。

〇委員
　インスタは記事にリンクが貼れなかったと思う。そういう意味では、Xの方がホームペ

ージやYouTubeに誘導できる。そのため、地域創生フェスにXは有効だと思う。
　地域創生の話題はすべて「love_hyogo」のアカウント名に統一しても良いのではないかと思う。ブランドは乱立させてはいけない。ほかに全体を通して意見はあるか。

〇委員
　地域創生フェスについて、成果をどう定量的に計ればいいかという話があったが、1日や2日ぐらいのイベントに来た人に、「どう変わったか」を聞くのは難しいと思うので、無理のない設計にした方が良い。
　例えばフェスの参加者に「新しいつながりが何人できたか」「どういうプラスがあったか」など定量的なチェックシートにチェックをいただく形でも良いと思う。
　フェスの成果は、提案された76件の方を追っていく形で良いと思う。当日に軽い気持ちで参加した人たちの成果を追っていく建付けにしてしまうと、今後が厳しくなる。今後、アイデアソンなどで継続的な成果は形づくられていくと思う。

〇委員
　アンケートの実施方法にいても工夫が必要。関西パビリオンの兵庫県ブースは、ボタンを押す形でアンケートを取っている。答えやすいボタンやシールを貼るような形で良いと思う。
　いただいた意見を踏まえ、事務局と整理していく。本日の議論のまとめだが、基本的にこの委員会は新しい取組みを行っているため、手探り状態となる。委員に参画いただく事業の候補については、得意な分野にかぎらず参画してもらう。その際、大事なことは参画しやすい環境を担当部署と相談しながら作ることかと思う。
　県庁内での理念の浸透については、今後の課題として捉えておきたい。指摘のあった戦略のKPIと個々の事業のKPIが乖離している可能性があるため、担当部署と、方向性の違いなどの意見交換を、現場を見てからアドバイスとして提案できる形にすればいいと思う。
　フェスについては、つながりが増えることを見える化するとともに、他の地域へ波及させることが大事となる。この辺りの成果を個々に拾い、発信していただきたい。
　地域創生インターンシップについては、なかなか学生が集まらないということであれば、条件緩和など検討をしても良いのでは。
　プラットフォームについては、積極的に参加していただく方々を拾い、アクション委員会とコミュニケーションが取れれば良いと思う。関係部署のワークショップへの参加についても実現できれば、地域創生の理念が浸透できるかと思う。
　ゲームについては、作るプロセスの方を目的にすることが重要かと思う。大人向けで良いと思うし、ワークショップのアイスブレイクでの活用案は良いと感じた。
　広報については、過去プロジェクトの事業の効果・検証が大切との意見があった。それらを整理してから、今後のプロジェクトや事業に活用してほしい。
　「love_hyogo」を地域創生のブランド戦略に位置づけるという話が出てきたので、検討されたい。

〇事務局

本日、長時間にわたり議論いただき感謝申し上げる。昨年度に続き、今回も非常に貴重な意見をいただいた。また、単に意見を述べていただくだけではなく、この戦略に積極的に参画し、関わっていこうという姿勢に感銘を受けた。

地域創生コラボレーションプロジェクトについては、夏に向けて大詰めを迎えるので、具体的な依頼を、今後させていただくことになる。

各部のプロジェクトへの関わりについては、本日いただいた意見を踏まえて、検討させていただきたい。

広報については、これまでの取組みを検証した上で整理し、これから取り組むべきものについて検討していきたい。

また今年度１年間、引き続きどうぞよろしくお願いする。